

氏名	緒方 康介		
学位の種類	博士（創造都市）		
学位記番号	第 6034 号		
学位授与年月日	平成 26 年 3 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者		
学位論文名	虐待による被害が児童の知的機能に及ぼす影響－知能検査を用いた計量心理学的分析 (Influence of Victimization by Child Abuse and Neglect on Intellectual Functioning in Children: Psychometric Analyses using the Intelligence Testing)		
論文審査委員	主査教授 弘田 洋二	副査教授 島 和博	
	副査教授 村上 晴美	副査准教授 篠田 美紀	(生活科学研究科)

論文内容の要旨

本論文は、児童虐待による被害がもたらす知的発達への影響について計量心理学的な手法を用いて分析した一連の実証研究によって構成（三部 7 章）されている。

導入部では、虐待被害児においてその知的機能が低いという事実を報告して嚆矢となった Kemp ら（1964）の研究以来アメリカで展開された虐待被害児研究の歴史を抑えている。虐待群全体の知的機能について自らがした追試や先行研究をレビューしながらメタアナリシスの手法で総合的な知見を導いている。第 II 章では、知能研究の歴史を概略しつつ、本研究で用いられる WISCIII という検査がもつ利点と妥当性を検証している。

第二部は、筆者が主に WISCIII をツールとして行った一連の実証研究が報告される中核部分である。第 III 章で、虐待種別の 4 種、つまり身体的虐待、性的虐待、心理的虐待、ネグレクトの被害児童（児童相談所受け付け記録による）それぞれの WISCIII 下位検査プロフィールの特徴の分析とその結果を報告した。そして、身体的虐待群と性的虐待群のいずれもが「絵画完成課題」において他の課題に比して相対的に高い達成を示していることに注目して、それが PTSD の過剰覚醒、知覚過敏という症状と関連する、トラウマティック・ストレス反応との関係を検討した（第 IV 章）。特異的なストレスが特定の知的機能の損傷と関連することが明らかとされた。

虐待被害による知能の低下が外傷性ストレスによってもたらされたのであれば、彼らは本来的には高い潜在能力をもっていること、そして環境変化によって IQ の上昇がもたらせるはずであるという仮説に立ち、それらを二群間比較によって検証している。検査実施構造に違いのある K-ABC を用いて、WISCIII における FIQ を統制した虐待群と非虐待群の両テスト得点の差を分析した。虐待群において K-ABC の得点上昇が対照群に比べて大きいことが確認された。次に、施設入所経験がもつ影響を、虐待群、対照群を比較し、虐待被害児を施設に入所させた場合、知能低下を抑制する効果が認められたばかりか、特にネグレクトにおいては FIQ が上昇する可能性を示唆する結果を得た。さらに、複数回 WISCIII を受検した記録をもつ児童を対象として、施設入所の有無との関連を調査し、虐待被害を受けた児童では、施設入所によって FIQ と PIQ に上昇がみられることを確認した。虐待被害児においては、施設入所は知的発達を促進することが明らかにされた。以上の実証研究に基づき、虐待被害種別と WISCIII によって検出される知的機能プロフィールに特徴的な差があることについて、その解釈を提示しつつ理論的な検討を行ったものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、児童虐待による被害の影響を、特に WISCIII を主に用いた知能（知的機能）の計量的把握をとおして探究したものである。筆者は児童相談所に勤務する心理技師であり、専門相談機関であるがゆえに集積されるデータを研究計画に合わせて活用した一連の研究集であり、非常にユニークな

情動的価値をもつ。そうしたデータを駆使して、筆者は主にアメリカの先行研究に着想を得ながら、WISCⅢをツールとしてFIQ、VIQ、PIQのほか下位検査の基準得点を目的変数として、虐待被害の有無、虐待の種別、トラウマ症状の程度、施設収容の有無など仮説的説明変数を設定しながら、群間比較による数量的実証性をもつ結果を示した。その研究手法の手堅さと研究遂行能力、および発見された課題に対して即応する生産性は秀逸であり、計量的な手法を中心とする犯罪心理学会で若手研究者奨励賞を受賞したことにも成果として表れている。

これら一連の研究の中で得られた結果についていえば、虐待種別とWISCⅢ下位検査課題との間で、身体的虐待と性的虐待において「絵画完成課題」が相対的に高いことをはじめとする知見は、知的機能の発達に関して重要な示唆を与えるものである。これまで、知能は生得的であり、環境との関係や学習要因に影響されないものと定義されてきたのであるが、本結果はそれに対する明白な対抗的知見であるばかりでなく、環境の特異的な性質が特定の知的機能に影響することが示されているからである。今後の虐待臨床、知能理論、情緒発達と知的発達の研究に貢献する知見として評価される。

知的機能の回復に関しても、先行研究では施設収容のもつ否定的な影響力が強調されてきたのであるが、筆者はそれを肯定的にとらえるべき実証データを示した。環境や人間環境の改善が知的発達にもたらす大きな影響力は、これまでの臨床実践をとおして経験的に知られているところではあるが、それを二群間比較によって実証的に示した点が最も評価できるところである。

以上のごとく、筆者のすぐれた実証的研究の遂行能力の高さ、新規性のある研究計画立案能力が発揮されている。本審査委員会は、本論文が創造都市研究科の課程博士としてふさわしい形式と内容を持っていると全員一致で評価した。